

2022年11月20日 説教「人の力、神の力」

列王記第二6章8～14節

前段においては、預言者仲間のひとりがヨルダン川に斧の頭を落としてしまった時に、エリシャがそれを浮かび上がらせたという出来事をみました。そこには、主なる神が人、物、状況を備えてくださる方で、日常生活に目をとめ、失われたものに対して深い関心とご配慮をしてくださることを学びました。



1. アラムのイスラエルへの侵攻計画 (8～10節)

①アラム王の戦略 (8)「アラムの王がイスラエルと戦っていたとき、王は家来たちと相談して言った。『これこれの所に陣を敷こう。』」今朝の聖書箇所は前段から、時も場所も異にしています。ここに出てくるアラムの王というのも、誰であるのかがよくわかりません。もし、少し前に出てきたナアマン將軍の時代の王だとすると、イスラエルの王に対して、ナアマンのことで腰を低くして手紙を書いたぐらいですから、敵対関係は感じません。ナアマン將軍にしても、自分の重い皮膚病をよくしてくれた神を信ずるようになっていたのですから、戦う気にはならなかったでしょう。24節には、アラムの王ベン・ハダデが出てきます。彼はベン・ハダデ二世と考えられ、第一列王20章に出て来る人物と同じだと考えられます。紀元前860年から17年ほど王であったので、この記事の王もベン・ハダデ二世の可能性がありますが、ただ、だとするとナアマン將軍を送り出したのも彼となります。ともかく、ここではイスラエルとアラムは戦いの中にありました。王が誰であれ、何らかのきっかけがあり、イスラエルに侵攻することになったのでしょう。アラム王は家来たちと相談して、進軍の陣の敷き方を決めたのです。

②エリシャの注意 (9)「そのとき、神の人はイスラエルの王のもとに人をやって言った。『あの場所を通らないように注意しなさい。あそこにはアラムが下って来ますから。』」一方、その戦いの時代のイスラエル王は、ヨラムと考えられます。神の人、預言者エリシャは、アラム王の作戦を読み取って、ヨラム王に「あの場所は通らないように」と注意喚起をしたのです。そこにアラム軍がやって来るからです。預言者は戦いには関わらないと思いがちですが、エリシャは神の民イスラエルのために立てられていましたので、国と民を守るために戦いの時にも用いられました。

③何度ももわたり (10)「イスラエルの王は神の人が告げたその場所に人をやった。神の人が警告すると、王はそこを警戒した。このようなことは一度や二度ではなかった。」イスラエル王は、エリシャから注意を促された場所に人をやり、その周辺の軍や人々に警戒するようにと言ったのです。できれば直接に衝突することを避けさせたのです。そのようにして、神の人エリシャは、アラムからの進撃に



ついて神から教えられると、それを使命のようにして伝えたのです。それは何回かにわたってなされました。

2. 戦いを読むエリシャ (11~12 節)

- ① アラム王は怒り (11) 「このことで、アラムの王の心は怒りに燃え、家来たちを呼んで言った。」さすがにアラム王も計画を実行するたびに、先回りされ、手が打たれていることから、怒り心頭に達しました。いくらなんでも、何回も自分達がすることが、うまくいかないとなると、これには裏があるに相違ないと思ったのです。そこで、その真相を知るべく自分の家来たちを集めることになりました。そして、彼らに述べます。
- ② アラム王の疑い (12) 「『われわれのうち、だれが、イスラエルの王と通じているのか、あなたがたは私に告げないのか。』」「われわれの味方のなかに、敵であるイスラエルの王やその周りの者たちに密告している者はいないか。」「お前たちも知っているように、われわれの計画はことごとく相手に読み取られている。」「お前たちのうちで、彼らと通じている者があれば、正直に伝えよ。」といった内容だと思われまふ。アラム王は内部に、相手方に通じている者がいるに違いないと考えたのです。
- ③ エリシャの賜物 (12) 「すると家来のひとりが言った。『いいえ、王さま。イスラエルにいる預言者エリシャが、あなたが寝室の中で語られることまでもイスラエルの王に告げているのです。』」すると、アラムの王にしてみれば、意外な応答がありました。すなわち、家来のひとりが言いました。「王様、私達の中には裏切って、情報を漏らしている者はいません。どうも、イスラエルには預言者のエリシャという者がいました、彼はいろいろと人の心を読み取ったり、将来のものを感知したりするようなどころがあるらしいのです。それこそ、信じられませんが、誰も入ることができない王様の寝室で話されたことを、遠くにいてわかるらしいのです。そして、それをイスラエル王に伝えているというのです。」

3. アラム王によるエリシャの搜索 (5~7 節)

- ① エリシャ搜索 (13) 「王は言った。『行って、彼がどこにいるかを突き止めなさい。人をやって、彼をつかまえよう。』」アラム王は叫びました。「行って、その預言者エリシャを捜せ。彼がいるところと突き止めよ。彼を捕まえろ。」何としてもエリシャを確保し、彼が今後、イスラエル王に情報を伝えることがないようにと命令をしたのです。アラム王も必死でした。
- ② エリシャの所在 (13) 「そのうちに、『今、彼はドタンにいる』という知らせが王にもたらされた。」そんなことをしているところに、アラム王に情報が入りました。それは「エリシャは今、ドタンにいる」という知らせでした。ドタンはサマリヤから北に15キロほど行っ

たところにありました。エリシャの時代から千年前にさかのぼり、創世記において、ヨセフはこのドタンの地で兄弟たちに売られてしまったことがありました (37 章)。

- ③ ドタンを包囲 (14) 「そこで王は馬と戦車と大軍とをそこに送った。彼らは夜のうちに来て、その町を包囲した。」アラム王はなんと、預言者エリシャを捕まえるために、馬、戦車、大軍を、ドタンに送ったのです。たった一人の預言者を捕らえるために、これほど物々しい態勢をとるとは、どうしたことでしょうか。それほどに手ごわい相手だと考えたのでしょうか。アラム王は、夜のうちにその町に来て、そこを包囲したのです。もはや、逃げるできないような態勢です。

《結論》今朝の聖書記事ので、アラムとイスラエルの関係が、なぜ悪化してい

たかはわかりません。ナアマン將軍が預言者エリシャを頼ってやって来て、重い皮膚病を、主から癒していただき、イスラエルの神を信じるに至ったという出来事については覚えておきたいと思ひます。

ナアマンの出来事からしばらくの時を経て、アラム王 (ベン・ハダデⅡ世)

は、イスラエルとの間に事を構えるために、陣を張りました。ところが、その作

戦はうまくいきません。二度、三度と攻撃をしようとするのですが、その度ごと

に、作戦が読まれているようなのです。アラム王は怒り、内通者を疑い、味方

の者達にそれを追及しました。すると、意外な応えが返ってきました。つまり、

それは味方に内通者がいるわけではなく、イスラエルの預言者エリシャがアラム王の作戦を読み取って、イスラエル王に知らせているというものでした。それに対して、アラム王はエリシャを捕まえて、敵イスラエルの知恵の出所を封じてしまおうとしました。ドタンにエリシャがいることを知ると、手強い相手と考え、戦車や大軍を使って、エリシャを捕らえようとした。

ここでアラム王は、アラムの戦力を用いるならば、エリシャを捕まえて、力を封じることが、簡単だと考えました。彼を無き者にすれば、それですべてが片付くと考えました。ここに大いなる過ちがありました。つまり、預言者エリシャは自分の力で事を成していたのではないのです。人間の力ではなく、神の力をいただいて、イスラエル王に助言をしていたのです。示された情報は、自分から出たのではないのです。アラム王は、このことを全く考慮に入れていません。

バプテスマのヨハネは優れた働きをして、救い主ではないかとも

思われました。ところが、ヨハネは「私はその方の靴のひもを解く値うちありません。」と言いました。つまり、人間の力と神の力とは比べものにはならないということなのです。キリストが水の上を歩かれた時、ペテロは「水の上を歩いてここまで来いとお命ください」とお願いしました。「来なさい」と主に言われて、彼は少し水の上を歩きました。しかし、風を見てこわくなり、沈みかけ「主よ。助けてください」と叫び、助けられると、「信仰の薄い人、なぜ疑うのか」と言われました。人間には水の上を歩く力はありません。疑わない信仰によって歩く時のみ、その可能性があったのです（マタイ 14 章）。預言者エリシャは神への信頼によって事をなしていました。彼の力ではなく、神の御力によって事をなしていました。実を言うと、ナアマンの出来事を通して、アラム王にもヒントが与えられていたのです。ところが、そのことは全く忘れられていたのです。

困難にある人も、ひとたび主の前に静まりましょう。そして主にお頼りいたし

ましょう。主は人間の考えを越えて事をなしてくださるかもしれません。人や状況を用いて事をなしてくださるかもしれません。あるいは、あなたに大いなる力を与えて、乗り越えることができるようにしてくださるかもしれません。事をなしてくださるのは主なる神です。讚美歌 267 はこのように証ししています。『自分の力や知恵を頼みとする、世は恐れるにたりない」「人の力がいかに強くても、頼るべきは共に戦ってくださるイエスこそが、万軍の主なる神だ」。

私達もこの主にお頼りしていきましょう。